

## ゾラ『真実 (Vérité)』における歴史とユートピア

宮 川 朗 子

【キーワード】 エミール・ゾラ、歴史、ユートピア、『真実』、『四福音書』

### はじめに

1899年11月29日、ゾラは出版したばかりの『多産 (Fécondité)』に対して好意的な批評を寄せたオクターヴ・ミルボーに宛てた手紙の中で、この小説の楽観的な性格を以下のように弁明している。

Tout cela est bien utopique, mais que voulez-vous? Voici quarante ans que je dissèque, il faut bien permettre à mes vieux jours de rêver un peu<sup>1</sup>.

これらすべては実にユートピア的です。でもどうしろというんですか？ 社会を解剖して40年になります。老後には、少くも夢を見させてください。

この一節は、後期ゾラの作品群『四福音書 (Les Quatre évangiles)』を理想主義的と評価する根拠として、長らく、そしてしばしば引用されてきた。確かに、この作品群に取められたそれぞれの小説の最終部で描かれる理想社会は、楽天的で単純な空想社会として多くの読者の目には映るだろう。しかしながら、1970年代あたりから、アラン・バジェスやデヴィッド・バギユレーなどによる、共和主義的理想の探究やそのための闘いの痕跡を後期ゾラの作品群の中に積極的に認める研究が徐々に出てきたように<sup>2</sup>、『三都市 (Les Trois villes)』や『四福音書』で提示された、この作家と同時代の社会的あるいは政治的議論を評価する動きも出てきている。実際、これらの作中で描かれた「夢」は、ゾラが『ルーゴン＝マッカール叢書 (Les Rougon-Macquart)』時代と変わらぬ観察眼を用いて、歴史家にも似た仕事をしながら構築したものであった。そして『四福音書』、とりわけこの作家自身が参加したドレフェュス事件の経験が随所に現われ、この作品群の最終作となった『真実』には、歴史やこの作家の生きた時代に活発に戦わされた政治的議論の影響が多々認められる。

そこで、『真実』における歴史の影響とこの小説の性格を構成する大きな要因であるユートピ

アとの関係を検証する。まず最初に、ゾラという作家、そしてその作品と歴史との関わりを確認し、この小説が単純で一面的な理想を描いているわけではないことを示したい。次に『真実』において具体的に認められる歴史の影響、さらにそれとユートピアとの関係を明らかにする。これらの検証を通して、その関係が単なる対立関係ではないこと、そしてこの作品におけるユートピアの特異性が明らかになるだろう。

## I. ゾラと歴史、そしてこの作家を代弁する登場人物マルク

ゾラと歴史の関係は、その複雑さがすでにクリストフ・シャルルによって指摘されている<sup>3</sup>。「第二帝政下のある一家族の自然社会史 (*Histoire naturelle et sociale d'une famille sous le Second Empire*)」と副題に示された通り、『ルーゴン＝マッカール叢書』は、膨大な資料をもとに創作されたものであるゆえ、この時のゾラの仕事は、確かに、資料の解釈を基礎とする歴史家の仕事と通底している。しかしながら、歴史家にとって鉄則となるアナクロニズムの回避や客観性の保持は、この作家の仕事においてはしばしば遵守されず、とりわけ拙論の対象とする『真実』が収められた最終作品群『四福音書』は、物語の始まりを同時代に設定しながら、未来社会で結末を迎えるという歴史の枠組みからの逸脱がみられる。

この点は、同じくシャルルが目する、小説世界に属しているはずの登場人物が、そこから抜け出て、俯瞰した位置からその世界を眺めながら歴史の教訓を引き出す傾向とも並行関係にあるように思われる。こういった人物から、読者は作家自身の見解を読み取ることになるのだが、その時、登場人物は、作者の意見を反映する鏡のような存在として考えられる。そして、晩年に向かうほど、ゾラは登場人物の思索に自身の意見をより直接的に導入するようになる<sup>4</sup>。

ところで、この傾向に関して、『四福音書』には、それ以前の作品群とは異なるある特徴がみられる。それまで作者の見解は、ほとんどが作品の最終部分において挿入されているのに対し、この作品群において、それは作品の始めの方からすでに主人公の思索の中で明示されるのである。このように、作者の意見が作品の始めから明確な形で挿入され、それを出発点として物語が展開されることは、この作品群の小説がなかならず「問題小説 (*roman à thèse*)」であることの証左となるが、拙論で注目したいのは、その意見にゾラの歴史観が如実に反映されているばかりでなく、その歴史観が登場人物の行動を決定づけていることである。例えば、我々の関心の対象となる『真実』において、主人公マルクのおかれた世界が歴史的な流れの中で説明されているが、それはこの人物の思索の中で展開され、さらにその行動も決定づけている。教会に対する戦いに挑むことを意味する、マイユボワの小学校への任命の打診後に、マルクが巡らせた思索を試みよう。

Depuis un demi-siècle, tout le travail souterrain de l'Église lui [=Marc] apparaissait, d'abord la savante manœuvre de l'enseignement congréganiste, la conquête de l'avenir par l'enfant, puis la politique de Léon XIII, la République acceptée pour être envahie et domptée. Mais, surtout, si la France de Voltaire et de Diderot, la France de la Révolution et des trois Républiques était devenue la pauvre France actuelle, troublée, dévoyée, éperdue, près de retourner au passé, au lieu de marcher à l'avenir, c'était que les jésuites, et les autres ordres enseignants avaient mis la main sur l'enfant, triplant en trente années le nombre de leurs élèves, élargissant leurs puissantes maisons sur le pays entier<sup>5</sup>.

半世紀前からの、教会の地下活動の全容が彼 [=マルク]の前に現れてきた。はじめに、修道会の教育による巧みな操作、つまり子供によって未来を征服することだ。次いで、レオン十三世の政策。それは共和国を受け入れたことだが、そのために共和国は、侵略され、手なづけられたのだった。しかしとりわけ、もしヴォルテールとディドロのフランス、大革命のフランス、そして三つの共和政を経験したフランスが、今の哀れなフランス、乱され、墮落し、未来に向かって歩む代わりに過去に戻ろうとするフランスになってしまったとするなら、それはイエズス会士たちが、そして他の修道会の教育者たちが、三十年のうちに生徒数を三倍に増やし、国中にその強力な教育施設を広めながら、子供を手中に収めたからだった。

Et la lutte se posait terrible, immédiate, aux yeux de Marc, qui jamais n'avait senti avec cette force la nécessité pour la France de tuer l'Église, si la France ne voulait pas être tuée par elle. (*ECNM*, 20, 113)

そして、その戦いは、マルクの目には、過酷で差し迫っているように現れていた。フランスが教会によって消滅させられたくないのなら、フランスのために教会を消滅させることが必要だと、これほどの力を持って感じられたことはかつてなかった。

この一節において、非宗教的、民主主義的、近代的フランスがあるべき姿だとされている。そして、「今の哀れなフランス」となった原因は、教会の活動の影響という判断である。そして、この結論を導き出した結果、マルクはマイユボワの小学校への任命を受け入れる。いわば、大革命以来のフランスの歴史を解釈することで、マルクの決心を固めさせるのである。

このように、物語における登場人物の行動に、ゾラは歴史を大きく関わらせているのだが、マルクが教会に挑む戦いの物語も、二つの歴史的事実によって決定づける。一つ目は、言うまでもなくドレフェス事件であり、もう一つは、1870年代から1910年代にかけて共和国と教会が激しく戦った初等教育の非宗教化の歴史である。

ドレフュス事件に関しては、この小説のプロットに、ゾラ自身が経験したこの事件の展開を採用したことは明白である。以下にドレフュス事件と小説『真実』のごく簡単な展開（参照：表）を挙げておく。

表：ドレフュス事件と小説『真実』の展開

ドレフュス事件	『真実』
1894年 陸軍士官ドレフュス、スパイ容疑で逮捕、後、有罪判決を受ける。	(主人公マルク、30歳前後) 小学校教員シモン、甥ゼフィランに対する暴力と殺人容疑で逮捕、有罪判決を受ける。
証拠発見。エステラジーが真犯人として浮上。	僧ゴルジアスが真犯人として浮上。証拠発見。
エステラジー無罪。	
ゾラ「私は告発する…！」発表	
ドレフュス再審。再度有罪判決。後、特赦。	シモン再審。再度有罪判決。後、特赦。
	ゴルジアス、罪の告白。
1906年 ドレフュス無罪判決獲得。名誉回復。	シモン無罪判決獲得。名誉回復。 (主人公マルク：80歳を過ぎる)

ドレフュス事件では、逮捕から無罪判決の獲得と名誉回復まで約13年かかったのに対し、この小説ではシモンの断罪から名誉回復まで50年以上の月日が流れたという時間的な長さの違いや、レンズでの再審を実現させた有力な要因となったゾラの「私は告発する…！」に相当するエピソードが小説では欠如しているという違いはあれ、この小説の事件の展開は、ドレフュス事件のそれとほぼ同じであり、ドレフュス事件において議論を巻き起こした証拠や出来事、つまり筆跡の問題とその鑑定者、偽の証書なども物語に盛り込まれている。それゆえ、この小説はドレフュス事件を彷彿とさせる要素に事欠かないわけであるが、その創作の意図は、単なる事件の小説化ではない。それは、ゾラが残したこの小説の「草案 (Ébauche)」の冒頭からすでに窺える。

Ce que je veux mettre dans «Vérité».

Je pars de cette idée que si les progrès humains sont si lents, c'est que la grande masse des hommes *ne sais pas*. L'instruction est donc à la base, savoir, et savoir surtout la vérité, permettrait la réalisation rapide de tous les progrès, assurerait le bonheur universel. – L'exemple récent que nous a donné l'affaire Dreyfus<sup>6</sup>.

「真実」の中に盛り込みたいこと。

人類の進歩があまりにも遅いのは、人間の大部分がものごとを知らないからだという見解から始める。教育はそれゆえその基礎となる。知ること、そしてとりわけ真実を知ることが、あらゆる進歩の素早い実現を可能にし、全世界の幸福を保証するだろう。——ドレフュス事件が我々に示した最近の例。

ドレフュス事件が単なる不幸な冤罪事件の一つではなく、この事件自体が、共和国の存亡に関わる危機を象徴するものであり、アルフレッド・ドレフュスの冤罪を晴らす運動は、この無実の人を支持する者たちにとって、共和国の精神を取り戻す運動を意味していたことは、この事件にかかわった人々の証言や様々な研究においてしばしば言われてきたことではある。そしてこの短い一節からも、ゾラがドレフュス事件をそのようなものとして判断していたことが窺えるだろう。つまり、この作家の考える共和国精神に適う実証的な方法によって真実を知ることの難しさを例証したのがドレフュス事件であり、この事件の教訓として、教育の重要性に注目するのである。コレット・ベッケルとヴェロニック・ラヴィエルは、『真実』の文庫版の序で、この小説の主題を当時共和国政府と教会との間で激しい戦いが繰り広げられていた公教育の非宗教化の問題であると、この問題の関連年表を巻末に付している<sup>7</sup>。この年表から主な事項を挙げてみると、公教育から修道会、とりわけイエズス会の勢力を排除する本格的な動きは1880年に始まり、同時にこの年、議会では義務教育とその非宗教化の法制化が論じられ始められる。翌年には、初等教育の無償化や修道院長が修道者に出す教員免許の廃止を定めた最初の「フェリー法 (loi Ferry)」が成立、またその翌年の1882年には義務教育と非宗教化が発表される (第2の「フェリー法」)。その十年後の1892年、先の『真実』からの引用中でも言及されたレオン13世の共和国への歩み寄りを示す回勅が出され、1901年に制定された結社の自由に関する法律では、認可を受けていない修道会に属する者が教育職に就くことが禁じられる。そして1904年、すべての修道者が教育職に就くことを禁じられ、翌1905年には、政教分離法が可決される。

ドレフュス事件と同時代で、かつこの事件よりも長きにわたって繰り広げられた公教育の非宗教化をめぐる共和国政府と教会の戦いは、少なくともゾラにとっては、ドレフュス事件における共和主義精神と反動的精神の戦いと同一なのである。そして、『真実』の主人公マルクの行動もほぼこの流れに沿い、それを大革命以来の近代フランスの歴史の進化によって決定づけるのである。

しかしながら、逆説的なことに、ゾラは初等教育においては歴史の授業を重視していないような態度も窺える。例えば、教権的な視学官モレザンが主人公マルクのクラスを視察した折、おどけ者で勉強の苦手なある生徒にマラーは立派だったかと質問し、「Oh! très beau, monsieur! (ECNM, 20, 128) ええ! とっても立派でした、先生!」と答えさせ、クラスの爆笑を引き起こさせている。他の場面では、マルクに「Il n'était qu'un rôle digne de la France, achever la Révolution, être l'émancipatrice. (ECNM, 20, 126) フランスにふさわしい唯一の役割は、大革命の仕上げをし、解放者となることだ。」と考えさせているほど、フランス革命を重視している態度を見せながら、革命の一段階を画す事件を挿入するような場面を挿入することは、矛盾しているように思われるだろう。

このことは、この場面に続いて生徒たちに宗教的な質問をするモレザンに苛立ったマルクに、

Vous êtes ici dans une école républicaine et laïque, résolument en dehors de toute Église, ne basant la connaissance que sur la raison et la science. (*ECNM*, 20, 129)

ここは、共和国の非宗教的な小学校で、全く教会の手の届かないところにあって、理性と科学のみに基づく知識に基礎を置いているのです。

と答えてさせているように、初等教育の基礎を何よりも理性と科学に置いているゆえ、それこそが革命の精神を受け継ぎ、育むものであるという立場からも、多少は説明がつくかもしれない。ただそれに加えて、初等教育における歴史の授業に対するゾラの批判的見解も大きな要因であるようにも思われる。

Marc, surtout, dès les premiers jours, voulut réagir contre l'éducation de violence, de terreur et de sottise donnée à l'enfant. On n'exaltait en lui, par le livre, par l'image, par les leçons de chaque heure, que le droit du plus fort, les massacres, les carnages, les villes dévastées, anéanties. De l'histoire, on étalait les pages sanglantes, les guerres, les conquêtes, les noms de capitaines qui avaient décimé l'humanité. On enfiévrant les petits cerveaux d'un fracas d'armes, de cauchemars de tueries rougissant les plaines. Les livres de prix donnés aux élèves, les petits journaux publiés pour eux, jusqu'aux couvertures de leurs cahiers de devoirs, ne leur mettaient sous les yeux que des armées s'égorgeant, des navires s'incendiant, l'éternel désastre de l'homme devenu un loup pour l'homme. Et, quand il ne s'agissait pas d'une bataille, c'était d'un miracle, quelque légende absurde, source de ténèbres : un saint ou une sainte délivrant un pays par la force de la prière, une intervention de Jésus ou de Marie assurant aux riches la propriété de ce monde, un prêtre dénouant d'un signe de croix les difficultés sociales et politiques. (*ECNM*, 20, 126)

マルクは、最初の頃から、子供に向けた暴力や恐怖や愚行の教育に対してとりわけ戦いたかった。本やイメージ、毎回の授業を介して、強者の権利、大量殺戮、虐殺やら荒廃して壊滅した町々しか子供の気持ちを掻き立てないのだ。歴史から、血みどろのページ、つまり戦争や征服や大量殺戮を行った軍人たちの名が、ならべられていた。武器の放つ轟音、悪夢、平原を赤く染める殺戮で、考える力の弱い者たちを熱狂させていたのだ。生徒たちに賞として与えられる本、彼ら向けに出版される三文新聞、宿題用のノートの表紙にいたるまで、殺し合いをする武器や、砲火を放ちあう船、人間の果てしなく続く敗北は、人を見れば敵と思えと言わんばかりの光景しか生徒たちの眼下にはないのだ。そして、戦いの場面でない場合には、奇跡やら、どこかばかげた伝説のような無知の源泉、つまり聖人や聖女が祈りの力で国を開放するとか、イエスマリアが金持ちにこの世の富を保証するために行ったとりなし



とか、僧が十字を切って社会的政治的な難局を解決するといった場面が描かれていたのだった。

『真実』における歴史教育に注目するクリスティアン・アマルヴィは、戦争に関する部分については、ゾラが主人公マルクを通して批判した歴史教育が、この小説のおおよその時代背景である1900年代には共和国の公立小学校では一般的に行われていたことであり、アナキストのルクリュ兄弟やフランク・キュプラらの思想が色濃く表れているマルクの平和主義的な教育（このような思想が教育の場に導入され始めるのは1914年以降とのこと）とは対立関係にあったこと、また奇跡や伝説に関する部分については、歴史の教科書にこのような要素があったのは、1880年代のフェリー法成立以前のことで、1900年代にはほとんどこのような教科書は公教育の場では見られないというアナクロニズムを指摘している<sup>8</sup>。ゆえに、この小説においてマルクの実践する教育が必ずしも同時代の共和主義的初等教育あるいはその理想を反映しているとは言い難いが、このようなアナクロニズムは、アマルヴィがほのめかしているように思われる調査不足というよりもむしろ、ともすれば教育の場が政治や教会の権力によって侵されかねないという不安の表れではないだろうか。文庫版のベッケルとラヴィエルの註にもある通り<sup>9</sup>、ゾラは、戦争と征服によって歴史を把握するやり方を問題視していた。そして、戦争そのものに全面的に反対していた訳ではないとはいえ、1870年以降増加し続ける軍備と軍事費を懸念し、フランスが軍事的理想を放棄することも願っていた。ゆえに、引用中にあるような子供向けの教材や読み物に描かれる軍事的衝突や奇跡の場面の視覚的な衝撃を懸念する見解をみせることは十分考えられるだろう。ただ、そのような歴史教育の傾向に批判を投げかけながらも、この小説においては、理想的な歴史教育の在り方までは示されない。これは、この小説を含めた作品群『四福音書』が、一般的に歴史的記述の比重が極端に軽い、トーマス・モア以来のユートピア小説の側面を持つゆえ、このジャンル自体が一因であるとも言えるかもしれない。さらに、ゾラの描く理想社会のある性格が、小説『真実』における歴史的記述の少なさの要因として考えられる。この点については、次章で考えてみる。

## II. 歴史の延長上に位置するユートピア

ゾラの歴史観に進歩の思想が色濃く反映されていることは疑いない。先の引用中（参照：註5を付した引用）の「ヴォルテールとデイドロのフランス、大革命のフランス、そして三つの共和政を経験したフランス」という事項の列挙を見ても明らかだ。つまり、18世紀の哲学者から生まれた思想が、大革命という歴史的イベントの間接的要因となり、さらにそれは、共和政として実践されたという、近代の歴史を民主主義の拡張の歴史としてとらえる見方である。そして、この小説

の冒頭で紹介されるフランス社会において、進歩することをやめ、逆に過去に戻ろうとする兆候を、主人公マルクが懸念するところにも、ゾラがこの進歩史観を肯定的にとらえていることが読み取れよう。このことは、ゾラの描く理想社会を他のユートピア小説のそれと区別させる特徴でもある。ゾラの理想社会は、トーマス・モアの『ユートピア (*Utopia*)』を原型とする古典的なユートピア小説のように、理想社会を地図上で特定できない場所に設定するタイプでもなければ、空間軸を時間軸に移し替えたメルシエの『2440年 (*L'An 2440*)』のように、突然タイムスリップすることによって異なる時代に移動したというものでもない。それは確かに架空の町を設定しているのだが、その町は、小説の冒頭ではフランスのどこかの地方にありそうな町の姿を呈している。そして、その町を近代的で民主的な方向に進ませることによって、理想社会を徐々に実現させるのである。この展開が意図的に構想されていたことは、「草案」からも明白である。

Je prendrai trois générations, les enf parents, les enfants, les petits-enfants. Et, avec les arrière-petits-enfants commencera le rêve. Je ne montrerai ce rêve que dans un chapitre final [...]<sup>10</sup>

私は三世代、つまり子 親、子供、孫の代を取り上げるだろう。そして、ひ孫とともに夢が始まるのだ。私はこの夢を最終章にしか示さないつもりだ [...]

「夢」という言葉で表現された理想社会像は、物語の最後、つまり、架空の地方の小都市の歴史的進化の最終段階に置くという構想である。このような進歩観は、実際、この小説『真実』においていたるところで認められる。例えば、主人公マルクの妻（以下の引用中の「孫娘 (la petite-fille)」) の家系は、以下のように説明される。

Et, de même, au moral, l'évolution se poursuivait : la grand-mère serve absolue de l'Église, la chair et l'esprit domptés, instrument passif d'erreur et de domination ; la fille, restée pratiquante, conquise toujours, mais troublée, torturée d'avoir connu le bonheur humain ; la petite-fille en lutte, pauvre cœur, pauvre raison où le catholicisme livrait son dernier combat, déchirée entre le néant menteur de son éducation mystique et la réalité vivante de son amour d'épouse, de sa tendresse de mère, ayant besoin de toutes les forces de son être pour se libérer ; l'arrière-petite-fille, libérée enfin, échappée à la mainmise du prêtre sur la femme et sur l'enfant, revenue à l'heureuse nature, à la glorieuse bienfaisance du soleil, dans un cri de jeunesse et de santé. (*ECNM*, 20, 293-294)

そして、同様に、精神においても進化は続いていた。祖母は、教会に絶対的に服従しており、肉体も精神も服従させられ、過ちと支配の受動的な手先になっている。その娘は、宗教



的实践をし続け、相変わらず支配されたままではあるが、人間的な幸福を知ったことで動揺し、さいなまれている。その孫娘は内的な葛藤に見舞われている。ひよわな心やひよわな理性にカトリシズムが最後の戦いを挑んだのだ。自己を開放するために自身の存在のあらゆる力を必要としながらも、神秘を信じさせる自分の受けた教育の虚偽にみちたむなしさと妻として愛したいという思いや母親としての優しさという生きた現実との間で引き裂かれていた。ひ孫の娘は、ついに解放され、女性や子供に対する僧の支配から逃れ、幸福な自然状態、太陽の輝かしい慈愛の下、若さと健康がほとぼしる叫び声をあげているただ中に戻ってきた。

祖母の代から、世代を経るにつれて教会から解放されていく様子は一目瞭然だ。さらに、引用中には言及されていないが、この解放はひとりでの実現していったわけではない。マルクの義母にあたる文中の「娘」が解放される兆しを見せたのは、科学者ベルトロウと結婚して愛情あふれる家庭を築いたという設定があり、解放が兆しにとどまってしまったのも、夫の急死という不幸で説明される。そしてその娘ジュヌヴィエーヴ(文中の「その孫娘」)は、修道会で教育をうけたものの、やはり科学的精神に貫かれたマルクと結ばれ、愛情を育んだがゆえに、自分の受けた教育とその教育に対立する夫との間で、その母親よりも激しい葛藤に見舞われるが、最終的には夫の元に戻る。このような展開を「進化」という中立的な言葉で形容しているものの、四世代にわたるこの家系の女性たちの変化は、明快さ、自由、健康といった肯定的な評価に向ってゆくところをみる時、それはむしろ進歩と言うべきだろう。そもそもゾラは、この小説において、教会に属していながらもシモンの無実を信じ、その誠実さゆえに苦しむカンデュー神父という唯一の例外以外は、一貫してカトリック世界を闇とし、その支配下にあるものを、精神が死んだもの、あるいは病んだものとして描いている。死んだものは人類の歴史において役割を終えたものであり、病んだものはやがて死にゆくもので、生きているものこそが現在の生を生き、未来につなげてゆくという進歩的進化論である。さらに、死は進歩のために必要であるともされる。

Beaucoup même des enfants, des petits-enfants, disparaissaient avant les pères, car la mort faisait sans repos son œuvre ignorée, fauchait des hommes comme pour fertiliser le champs où d'autres hommes pousseraient. (*ECNM*, 20, 376)

多くの子供、孫たちさえも、父親より先に亡くなった。というのも、死は休まずに、それとは知らずにいた仕事をし、他の人間が生まれる地を肥やすためであるかのように、何人もの人間をなぎ倒すのだ。

ベッケルとラヴィエルの註にある通り<sup>11</sup>、この考えは、1866年に創作した(発表は1868年)『ジャ

ン・グルドンの四日間 (*Les Quatre journées de Jean Gourdon*)』の中ですでに示していたほど、ゾラの死生観としては古いが、『ルーゴン＝マッカール叢書』時代においては、ジャンヌ・ベストが指摘するように<sup>12</sup>、ゾラの進歩思想は、漸進的な進歩というよりも、『ジェルミナル (*Germinal*)』の展開に見られるような、破壊と誕生の繰り返しでしかないような傾向が強かった。しかしながら、ここにおいて、死の「仕事」は、全てを一掃する壊滅的な破壊を意味せず、むしろ人類の進歩に適さないものの排除という、自然淘汰的な考え方に近くなっている。

進歩史観の表出は、登場人物の世代交代だけにとどまらない。この小説に挿入された二つの入れ子構造のエピソード (*mise en abyme*)にも認められる。一つ目は、第1部第3章にあるド・ケドヴィル伯爵夫人の孫ガストンの溺死事件である。ガストンは、手におえない腕白な少年であり、彼の家庭教師であるフィリバン神父が監視していたにもかかわらず、川の危険な深みに入り込んでしまい、一緒に遊んでいたジョルジュ・プリュメという少年 (後のゴルジヤス、シモン事件の真犯人) が助けようとしたがむなしく、溺死してしまったとされる。唯一の相続人を失った伯爵夫人は深く悲しみ、その翌年亡くなってしまうと、残された財産は、イエズス会に譲渡され、そこに修道会の学校が設立される。その後、この学校の校長に就任したのがフィリバン神父に近く、この神父よりも年上で、当時僧としての栄誉を一身に受けていたクラボ神父であった。(参照 *ECNM*, 20, 83-84) 後にゴルジヤスは、シモン事件に関して自分の犯した罪を告白する際、このガストンの溺死も事故ではなく、誰かに押されたところを見ていただけだったと告白する。(参照 *ECNM*, 20, 367)

もう一つのエピソードは、第4部第4章にあるフランソワ事件である。マルクの孫のフランソワは、シモンの孫のテレーズと結婚し、マイユボワで幸せな家庭生活を送っていたが、ある日突然、勤務する学校のほぼ正面に位置する家に住む美しく若い女性に一目ぼれしてしまい、家庭を捨てて彼女とともに町を後にする。その後、フランソワの娘ローズは、帰宅途中何者かに襲われそうになる。意識を取り戻したローズは、犯人は父親であったと言う。その後、犯人の捜索が行われるが、その頃マイユボワに戻ったフランソワと再会したローズ自身が、父親が犯人でないことを確認する。同時に現場に残されたハンカチの持ち主探しや目撃証言などが迅速に寄せられた結果、真犯人はフランソワに似せて偽のひげをつけたフォスタンという男だと判明する。フォスタンは教会勢力に近かったため、この事件は、ますます発展してゆく公共の小学校に対して教会が仕組んだ罠だったのではないかという疑念が残ったとはいえ、真実と正義の教育が行き届いたマイユボワでは、たとえ冤罪事件が起こったとしても、すぐに正されることを証明する事件となる。(参照 *ECNM*, 20, 378-386)

この二つのエピソードの展開は、拙論のIにある表に示した小説『真実』全体のストーリーの展開と呼応関係にある。すなわち、ある事件が起こり、無実の人が訴えられる、あるいは真犯人が隠される。しかしその後、真実が次第に明らかになり、真犯人が突き止められるという展開

だ。さらに、当初証拠の品や事実を隠したのが教会側の人間（シモン事件では習字の手本から修道会の印を破り取ったフィリバン神父、ガストン事件では虚偽の証言をしたジョルジュ・プリュメ、フランソワ事件では真犯人に気づきながらすぐには言わなかったマルスイエ）ということも共通する。そして、この二つのエピソードの配列にもゾラの進歩観の反映がみられる。つまり、最初のエピソードは、カトリック世界の出来事で、犯罪と偽りの証言で真実が隠蔽されることによってカトリック世界の繁栄が築かれたのに対し、二番目のエピソードは、ゴルジアスの告白によって、最初のエピソードの真相が暴かれた後、もはや人々に対する教会の支配がほぼ終結し、真実と正義が支配する社会での出来事で、過ちは犯されても、迅速に解決されることを証明する。これは、登場人物の世代の経過が、教会勢力からの精神の脱却を示していたのと並行関係にある。冤罪事件がカトリックの勢力下にある社会では解決されないのに対し、この勢力から脱した科学的精神と理性が支配する社会においては、過去の事件までもが明らかになる。最初のエピソードの真相が、小説中、シモンの無罪と名誉回復が実現しつつあるときになって明らかになったことも、この傾向を強めていると言えよう。ゾラのこの小説においては、カトリック世界は常に過去であり誤謬であり、この世界から抜け出すこと、先に挙げたマルクのセリフによるなら「理性と科学のみに基づく知識に基礎を置いた精神が支配する世界となることが人類の進歩なのだ。

それゆえ、ゾラの『真実』の草案において、「夢」は最終章にのみ置くとした意図は明らかになる。ゾラのユートピアは、歴史の延長上に位置し、絶えず進歩を続けるを感じさせなければならぬからだ。ゆえに、そのユートピアは、いわば来るべく歴史を予見する。この小説の展開とドレフュス事件の展開とを照合しながら歴史的事実を確認するなら、ドレフュスの無罪判決と名誉回復はゾラの存命中にはなされなかったのに対し、小説では無罪も名誉回復も実現している。同様に、ドレフュス事件において、エステラジーの罪状は、この人物に対する裁判以降は不問に付されたままであるのに対し、『真実』のゴルジアスは、真実と正義を追求する市民の前で罪を告白する。また政治的な面においても、政教分離と公立の小学校教員の待遇の改善という存命中には実現されなかったことを、小説中では実現させている。これらの歴史的事実は、この作家が知りえなかったこととはいえ、その存命中にも議論されていたものである。さらに特赦という政府によるドレフュス事件の解決に対する苛立ちが顕著に表れた論文<sup>13</sup>を読むとき、小説において、理想的な形でこれらの裁判上の不透明事項を解決させ、政治的改革を実行させた意図は明白だ。とはいえ、この小説中でマイユボワという小さな地方都市においてのみ実現していたはずのことが、第4部第4章の冒頭において、フランス全体において実現されるとする敷衍化は、この傾向が極端に推し進められているようにも思われる。

Autrefois, il y avait eu deux France, recevant chacune une instruction différente, comme

cultivée à part, et dès lors s'ignorant, s'exécraient et se combattant. [...]

Maintenant, une France unique était en train de se constituer, il n'y aurait bientôt plus ceux d'en bas et ceux d'en haut, ceux qui savaient écrasant, exploitant ceux qui ne savaient pas, dans une sourde guerre fratricide, exaspérée parfois, affolée jusqu'à rougir le pavé des rues. L'enseignement intégral pour tous fonctionnait déjà, tous les enfants de France devaient passer par l'école primaire laïque, gratuite et obligatoire, où le fait expérimental, et non plus la règle grammaticale, était la base de l'instruction entière. [...]

Ainsi, disparaissait cette France coupée en deux, où il y avait deux classes, deux races ennemies, en continuelle guerre, élevées dans deux planètes différencées, comme si elles ne devaient jamais se rencontrer et s'entendre. [...] (*ECNM*, 20, 374-375)

かつては二つのフランスがあり、あたかも別々に育てられたかのようにそれぞれが異なる教育を受けていた。それゆえに、互いを知りあうこともなく、憎しみ合い、相争ったのだ。 [...]

今や、一体となった一つのフランスが成立しつつある。まもなく、階級の下にいるものや上にいるものはなくなり、時として激化し、通りの敷石までも赤く染めるほど狂気かられた兄弟殺しの陰謀において、ものごとを知っているものが知らないものを踏みにじり、利用することもなくなるだろう。万人のために統合された教育がすでに機能しており、フランスの全ての子供たちは、非宗教的で無償で義務的な小学校に入らなければならなくなった。そこではもはや文法的な規則ではなく、実験によって証明された事実が教育全体の基礎に置かれていた。 [...]

それゆえ、二つに切断されたこのフランスは消えた。二つの階級もなく、二つの敵対しあう人間の部類もなく、絶え間なく戦争をつづけ、二つの異なる惑星でそれぞれ育てられたので、あたかも一度も会ったことがなく、理解し合うはずもなかったようなフランスは。 [...]

現実社会の懸念事項を歴史の延長上で理想的に展開させることは、この引用の前に挙げた個別的な事項にとどまっていない。ここでは、マイユボワという架空の都市の理想を描いた物語がフランス全体の歴史に敷衍化され、いわば理想と現実の総入れ替えが起こっている。そして、ユートピアは、歴史の延長上で、あたかも接木されるかのように歴史の位置につき、想像上の歴史を展開させる。そこにゾラのユートピアの特徴が現われるのである。

この性格を考慮する時、前章で保留にしていた問題、初等教育における歴史教育の比重の軽さに対して、もう一つの説明を加えることができるだろう。ゾラの進歩的歴史観においては、過去は死んだものであり、いわば踏み越えて進むためのものである。ゆえに、過去から学ぶ必要はあまりないのだ。この小説の最終部におけるシモン名誉回復も、過去においてどのように過ちが犯されたかという詳しい過程を学ぶことはなく、単にあまりにも明白な真実が受け入れられな

かった過去の過ちとしてとらえられ、新しい時代がその修復をするという方向に向けられている。また、フランソワ事件、真実と正義が実現した社会においても人間が過ちを犯してしまう可能性や夫婦の間の愛情の問題をほのめかすエピソードをこの小説の最後に置いたのも、次の世代への課題として残したとも考えられよう。この小説全体を通してマルクが戦ってきたように、ゾラの進歩観は、常に戦いによって実現されてきたものであるから、理想の中にも解決すべき課題を残す、つまり進歩の余地を残しておくのだ。

## おわりに

歴史家とゾラ、歴史家の研究とゾラの作品との関係は、一見対応しているように見える。しかし、前者に関しては、作家は文献的事実から離れ想像界に飛躍し、後者については、歴史的事実の分析というよりも、独自の進歩史観に沿った物語、楽天的な科学主義、つまり科学の進歩に伴って人類と社会も進歩するという考えに強い影響を受けた物語なのである。

また、歴史とユートピアの関係も、単純な対立関係ではない。『真実』は、それまでのどの小説よりもゾラと同時代の歴史に決定づけられた作品であるが、ここで、ユートピアは、進歩する歴史の最終段階として現れ、いわば歴史の位置につく。この時、ユートピアはそこに描かれた社会の想像上の歴史を刻んでゆくことになる。『真実』そしてこの小説を含む『四福音書』全体において、あまりにも支配的な進歩思想と問題小説特有の教訓的なエピソードの数々は、これらの作品を早く古びさせてしまった大きな原因であるが、固定された社会を描くことが一般的となっているユートピアがそこに取り込まれるとき、実に興味深い現象となる。『四福音書』すべての小説の最終段階に現れた理想社会像を見ると、伝統的ユートピア小説に特徴的な、完璧であるがゆえの変化のなさが支配的であるにもかかわらず、進歩の余地を認める工夫も見出されるからだ。それこそがゾラのユートピアのもう一つの大きな特徴でもあるのだが、この問題については、『真実』のみならず『四福音書』全体を視野に入れながら、今後検討してゆきたい。

## 註

- 1 ZOLA, Émile, *Correspondance*, tome X, B. H. Bakker (s.l.d.), Les Presses de l'Université de Montréal, 1995, p. 101.
- 2 例えば、BAGULEY, David, *Fécondité d'Émile Zola*, University of Toronto Press, 1973や「ゾラと共和国 (*Zola et la République*)」の特集を組んだ自然主義文学の研究雑誌 *Les Cahiers naturalistes* の54号(1980年)、Émile Zola, *un intellectuel dans l'Affaire Dreyfus*, Séguier, 1991. を皮切りに、ドレフュス事件とゾラに関する研究を次々と精力的に発表するアラン・パジェス



の研究が挙げられる。

- 3 参照：CHARLE, Christophe. « Zola et l'Histoire ». In SACQUIN, Michèle (s.l.d.) *Zola et les historiens*. Bibliothèque nationale de France, 2004, p.12.
- 4 クリストフ・シャルルは、この傾向を、『ルーゴン＝マッカール叢書』においては『制作 (L'Œuvre)』のサンドーズ、『金 (L'Argent)』のカロリン夫人といった脇役の思索中に見出し、『三都市』においてその役割が主人公のピエール・フロマンに与えられたことで、作家自身の意見をより大胆に導入するようになったとみているが (参照：Ibid., p. 20.)、『ルーゴン＝マッカール叢書』においてもすでに、『ボヌール・デ・ダム百貨店 (Au Bonheur des dames)』の最終部分における主人公ドゥニーズの人生に対する思いにも表れており、この叢書時代の作家自身の見解の挿入がそれほど控えめだったとはいえないだろう。また、興味深いのは『ジェルミナル』で、この作品の最終部分における主人公エチエンヌの人生や社会についての見方は、この人物の生半可な社会的ダーウィニズムの理解に基づいているだけに、必ずしもゾラの見解とは一致していない。この点に関しては、別の論考が必要になるだろう。
- 5 ZOLA, Émile, *Vérité*. 1902. In ZOLA, Émile, *Œuvres complètes*, tome 20, MITTERAND Henri (s.l.d.), Nouveau monde éditions, 2009, p.112. (尚、鍵括弧内は引用者による加筆。また、この全集は *ŒCNM* と省略し、ここからの引用は以後巻号とページ番号のみを記すこととする。)
- 6 ZOLA, Émile, « Ébauche », *Œuvre. Manuscrits et dossiers préparatoires. Les Évangiles. Vérité. Dossier préparatoire*. Bibliothèque nationale, Manuscrits, NAF 10343, f° 305.  
参照：http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b9079783q/f315.image.r=langFR (vue 315) なお拙論中で引用される草稿については、綴り字は現代の用法に改め、表記は本論集の規定に従うものとする。
- 7 ZOLA, Émile, *Vérité*, 1902. In ZOLA, Émile, *Vérité*, préface, commentaires, notices et notes de Colette Becker et Véronique Lavielle, Livre de Poche, 1995, pp. 14-15, 693-695.
- 8 AMALVI, Christian, « Les idées pédagogiques et éducatives d'Émile Zola à travers l'étude de son roman *Vérité* », In SACQUIN, Michèle (s.l.d.) *op. cit.*, pp.78-80, 82-83.
- 9 ZOLA, Émile, *Vérité*, préface, commentaires, notices et notes de Colette Becker et Véronique Lavielle, *op. cit.*, p. 212.
- 10 ZOLA, Émile, « Ébauche », *op. cit.*, NAF 10343, f° 372.  
参照：http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b9079783q/f315.image.r=langFR (vue 390)
- 11 Cf. ZOLA, Émile, *Vérité*, préface, commentaires, notices et notes de Colette Becker et Véronique Lavielle, Livre de Poche, 1995, p. 616.
- 12 BEST, Janice, «Le naturalisme est-il un nihilisme?», *Les Cahiers naturalistes*, 2003, p. 49-57.



- 13 例えば、ZOLA, Émile, « Lettre à Madame Alfred Dreyfus », *L'Aurore*, le 29 septembre 1899 ; ID. « Lettre au Sénat », *L'Aurore*, le 29 mai 1900, dans *ÆCNM*, 18, 2008, p. 466-479.

## Histoire et utopie dans *Vérité* de Zola

Akiko MIYAGAWA

**[mots-clés : Émile Zola, Histoire, utopie, *Vérité*, *Les Quatre évangiles*]**

L'Histoire, on le sait, joue un rôle important dans la création romanesque de Zola. Son influence ne se limite pas à la question de la répercussion des faits historiques dans ses œuvres, mais l'Histoire constitue aussi sa méthode de création : documentation et analyse de données. Cependant, cette méthode, qui ressemble à première vue, à celle de l'historien s'accompagne parfois d'anachronismes et s'éloigne de l'objectivité ; l'écrivain le plus souvent laisse libre cours à son imagination.

*Vérité* est un roman écrit selon cette méthode de travail pseudo-historique. Mais l'influence de l'Histoire y est plus patente que dans les autres romans zoliens : non seulement il transpose l'histoire de l'Affaire Dreyfus au roman, mais il y développe aussi la question de la laïcisation, vivement discutée des années 1870 aux années 1910. Toutefois, il ne semble pas que Zola donne de l'importance à l'histoire dans l'éducation des enfants. Dans le roman, un épisode de la Révolution, la mort de Marat, est quelque peu raillé dans la scène du cours d'histoire à l'école primaire. Cette tendance s'explique d'une part, par la spécificité propre au genre du roman utopique dans lequel l'Histoire pèse peu, et d'autre part, par la nature de l'utopie zolienne fortement marquée de l'idée de progrès, susceptible de remplacer l'Histoire.

L'idée de progrès et des épisodes moralisants qui l'illustrent sont certes les deux éléments majeurs qui ont vieilli ce roman. Mais l'originalité de l'utopie zolienne consiste justement en cette idée de progrès s'associant à l'utopie dont la nature est en principe statique.